

# 教職大学院における附属学校での実習の在り方に関する一考察

山 元 卓 也 [鹿児島大学教育学系(教職大学院)]

廣 瀬 真 琴 [鹿児島大学教育学系(教職大学院)]

山 口 幸 彦 [鹿児島大学教育学系(教職大学院)]

Considerations on the status of practical training at university-affiliated schools (elementary, junior high, and high schools) within teacher education at university graduate schools

YAMAMOTO Tatsuya, HIROSE Mokoto and YAMAGUCHI Yukihiko

キーワード：教職大学院、高度化実践実習、附属学校

## 1. はじめに

本学は、平成 29 年 4 月に鹿児島大学大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻（以下、本学教職大学院）を開設した。その開設にあたっては、設置の準備段階から鹿児島県教育委員会との連携のもと、本学教職大学院に求められている使命・独自性に関する意見交換等を行いながら、県内 9 つの市町村教育委員会とも連携協定を結び、学部新卒学生・現職教員学生に提供するプログラム構築を行ってきた。開設年次は院生 12 名（学部新卒学生 2 名と現職教員学生 10 名）でスタートし、現在は院生 16 名（学部新卒学生 6 名と現職教員学生 10 名）が学んでいる。

本学教職大学院で育成しようとする人材像は、①新たな学校づくりの有力な一員となり得る新人教員と②地域や学校で指導的役割を果たし得る中核的教員であり、それを実現するためのカリキュラムの特色の 1 つに「実習科目を核とした共通科目，選択科目の連動」挙げている。4 学期制を活かし、カリキュラムの中で「実習」と「共通科目」，「実習と」と「選択科目」の随時の往還を実現している。つまり、本学教職大学院の学生は 1 年次から多様な「実習」を体験し、理論から実践へとといった一方向的にではなく、円循環的に学びを深めている。

本学教職大学院では 3 つの分野（指導法深化，組織経営，学校研究）から，院生が専門分野を 1 つ選択し，2 年間かけて探究したいテーマを指導するシステムを探究チームと呼称している。また，省察チームと呼称している実習の省察指導システムが構築されており，全教員で実習に関与するにあたり，主たる指導をする専門担当者と指導を補佐する副担当者，両者をサポートする支援担当者という 3 種の役割に分かれ，各役割

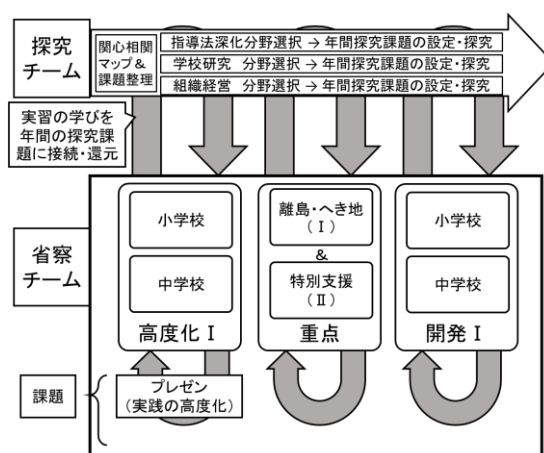


図 1 指導体制と実習の位置付け

から構成される指導チームが、院生チームの指導にあたっている (図1)。

実習科目は、特徴的な3つの全く異なるスタイルの実習 (高度化実践実習, 重点領域実践実習, 開発実践演習) から構成されているが, 本稿ではその1つである「高度化実践実習 I」についてまとめたい。高度化実践実習 I は本学教育学部附属学校で実施されるもので, 教職大学院入学後最初に行う実習であり, 個別の探究課題の設定から実習の計画, 成果の発表を長期にわたって取り組む実習である。そのため, 実習に戸惑う院生も多く, 教員スタッフの関わりも重要となる。そこで, 本稿では, これまでの取組を振り返りつつ, 院生にとって高度化実践実習 I がどのような学びにつながっていったのかを述べてみたい。

## 2. 高度化実践実習 I の概要

本実習は, これまでの実務経験 (実習経験含む) で得た学びを拡充することを目的としている。経験や学びを振り返る視点を獲得するために, 院生は, まず, 学校観察及び実務の補佐を行い, 学校経営や組織全体像, とりわけ各業務 (教育課程経営, 研修, 生徒指導, 学級経営等) の内容や, その遂行において求められる専門性について確認する。なお, 院生は, これまで取り組んできた実践や職務等を振り返り, 自らの探究課題を設定し, その探究課題に対して共通科目や選択科目での学習内容を活用し, 課題の改善方策を構想していく。観察から構想に至る過程において, 院生がポートフォリオに学びの足跡を綴り, それを他の院生と共有する。

本実習は, 学部での学修や現職での学びを基礎としながら, 教職大学院における共通科目 (特に第2領域の授業研究の実践と課題, 第5領域の鹿児島における学校教育と教員のあり方), 選択科目では特に, 学校研究の手法と実践 (学校研究科目), 初等・中等教育における協働的指導法開発 (指導法深化科目) と関連する内容である。また, リフレクション科目である教職課題研究 I と関連しながら, 課題の設定や活動のまとめを行うことにしている。

本実習における, 学部新卒学生と現職教員学生の学びの到達目標は以下のとおりである。

[学部新卒学生]

- ・単元レベルや年間指導計画等, 長期的な指導及び評価計画が立案できる。
- ・授業以外の業務 (担任業務, 教育課程経営, 研修, 生徒指導等) を理解することができる。

[現職教員学生]

- ・年間指導計画や単元計画, 授業実践等, 過去の授業実践の改善点を明確にできる。
- ・授業以外の組織的な業務 (教育課程経営, 研修, 生徒指導, 学級経営等) について, 連携協力校の教職員と協働し, 計画立案や遂行, 評価ができる。

実習校である附属学校については, 次のとおりである。(平成29年4月9日現在)

- ・鹿児島大学教育学部附属小学校 (以下附属小学校) 学級数 15, 生徒数 600 人, 教員数 33 人
  - ・鹿児島大学教育学部附属中学校 (以下附属中学校) 学級数 27, 児童数 863 人, 教員数 44 人
- 両学校とも教育学部研究科と同一キャンパスにあり, 地理的環境に恵まれているのが特徴の1つである。

### 3. 実習の流れと主な内容

現職教員学生は自身の原籍校の校種を基本に、学部新卒学生は取得免許を基本に希望する校種で実習校を決定している。院生は附属小学校に7名（現職教員学生6名、学部新卒学生1名）、附属中学校に5名（現職教員学生4名、学部新卒学生1名）配属され、実習をスタートした。

#### 3.1 事前指導（探究課題の設定）

実習の事前指導として、個別の探究課題を設定させた。到達目標に沿った「個人の实践（授業を中心とした）の高度化」と「組織的業務の高度化」の2つの視点に加え、実務習熟と課題探究の2つの型を意識させることを事前指導の1つの目的として、探究課題シート（図2）の作成に取り組みさせた。表1のように、4つに分類した次元に現職教員学生と学部新卒学生における探究課題の目安を示し、探究課題シートに2つの型のトピックを書き出させることにより、これまでの実務経験等を振り返ることにつながり、本実習の目的である学びの拡充が期待された。なお、探究課題については、実習校の状況に応じ実習に取り組みながら随時変更することができるように配慮した。

#### 3.2 共通実習

本実習の授業計画の前段は、学校及び児童生徒の理解を深めつつ、後半での実習における探究テーマを模索する期間とするために、学校経営についての聴講、学校の特色に関する業務や授業の参観を校種別に共通の実習として行った。特に附属学校の特色である研究公開へ向けての取組については、研修に関する組織的な業務として位置付けも視野に入れ、研究公開の運営に関する協議や公開授業の事前指導研究会での検討に加わり、研究公開当日の参画も実習として位置づけた。

附属中学校においては、研究公開の運営に関する打合せの会に参加し、全職員による細かな分担と、互いの密な連携によって研究公開が実施されていることを痛感している様子であった。また、研究委員会という組織がその中核となって企画運営に関わっている事を知り、組織の在り方についても関心が深まっていた。

附属小学校においては、公開に向けた授業づくりとして、指導主事等を交えた事前研究会に参加し、院生個人の研究教科についての知見を深めることができていた。また、各教科に分かれて行われる小中

表1 実務習熟と課題研究の目安

	組織的業務	個人の实践の高度化
実務習熟	学卒：◎（学部実習以外の業務） 現職：○（経験のない業務）	学卒：○（経験と知識に応じて） 現職：△（経験と知識に応じて）
課題探究	学卒：× 現職：○（経験と知識に応じて）	学卒：◎ 現職：◎

※ ◎、○、△、×は適する度合を示す

めざす教師像		めざす学校像	
授業等の実践に関する探究課題		組織的業務に関する探究課題	
個人の实践の探究トピック	個人の实践の高度化の習熟事項	組織的業務の探究トピック	組織的業務の習熟事項
①	①	①	①
②	②	②	②

図2 探究課題シート

実習の流れ



図3 実習の流れ

連携部会にも参加し、両校種の研究内容についても理解を深めることができていた。

### 3.3 個別の計画による実習

学部新卒学生においては、これまでの実務経験は学部実習が中心となるため、個人の実践の高度化として、学部実習を主としたこれまでの実践の課題をもとに検証授業を実践することにした。学部実習での課題については、教材理解、子供の実態把握と個に対応した指導、発問の仕方などが挙げられており、指導案作成に多くの時間を費やし、授業を流すのに精一杯であったことが窺えた。本実習では、これらの課題解決に向け、現職教員学生や実習校の担当教員等の指導を受けながら、子ども一人一人に目を向けた指導の在り方や発問、KR等の充実に焦点を絞った授業実践が行われた。具体的な事例として、夏休み終了直後の実習で、子供たちの夏休みの作品の掲示の体験を行っている。子供たちの楽しい思い出の詰まった絵や作文を担当とともに展示のための処理をし、実際に背面黒板に掲示した。授業経験も喜んでいて、学級経営の一端を実務として経験できて、「早く現場に行って子どもたちの前に立ちたい」という思いが高まったようである。

現職教員学生においては、個人の実践の高度化、組織的業務の高度化の両視点とも課題探究の型で取り組んでいる学生が多く見られ。授業実践に関しては、新学習指導要領で求められている資質能力や授業改善の視点、これまで主として研究を行ってきた教科や領域についての指導法等が探究の中心となっていた。組織的業務に関しては、カリキュラム・マネジメント、協働、リーダーシップといったキーワードが多く、中核的な立場としての意識と原籍校での課題等を踏まえた探究がなされていた。

具体的な実習場面としては、授業やその他の活動の参観が中心であったが、後半からは聞き取りを行ったり、授業の支援に加わったり、会議等で意見を述べるなど積極的に取り組んでいる院生が多く、実習の実時間も必須の60時間を超えて活動している状況であった。これは、連携協力校である附属学校が学部と隣接しているため、時間単位で行き来できることもあり、附属学校の教員との繋がりも短い期間で構築できるといったことによる実習の取り組みやすさが影響している面もあると考えられる。具体的な事例として、行事表にある「企画・運営プロジェクト」会議の参観申し出が現職教員学生からあり、副校長はじめ4人で毎週開催している打合せ会の参観の許可をいただいた。各種行事の日程調整や教育課程の進捗状況、懸案事項の検討等、まさに附属小学校の「いま」の話題が多く取り上げられていた。参観した現職教員学生からは「私たち外部が入ってよかったんでしょうか。こんな風に学校の将来のことを語り合っているんですね。」との感想が述べられるなど、感慨深げだった。

### 3.4 プレゼンテーション発表会

10月26日に高度化実践実習Ⅰの総括として1人20

#### 2. 実習で得たデータの活用パターン例

自分の実践経験と、実習で見聞きした事例との関係性を、どう構築する？

- ① 「片方がすぐれた恋愛マスターで、もう片方がそこからヒントを得る」というお手本的事例関係
- ② 「どちらも恋愛に悩んでいて、悩む人の共通点を得る」という悩み共通の事例関係
- ③ 「どちらも恋愛マスターで、両マスターの共通する恋愛術を得る」というマスター的事例関係
- ④ 「恋愛マスターと友情マスターの双方の良い点を足そう」とする異種合体ロボの事例関係
- ⑤ その他(自分で考えた関係性)

図4 自己の実践と実習校での実践との関係

分のプレゼンテーション発表を行った。発表資料の作成については、実習の個別実習が始まる頃に事前指導の時間を設定し、プレゼンテーションの全体像や方向性、テーマと内容構成、データの活用等について具体例を示しながら説明を行った。プレゼンテーションの構成については、以下の①～⑥の項目を例示し、スライド数16頁程度でまとめることとした。

①テーマやその設定理由（動機の説明）、②プレゼンの全体像、③実習で得たデータの整理、④事例の関係性の構築、⑤過去の実践修正や新たな実践の創造、⑥今後、実習や大学等で深めたいこと

その際、実習前に作成した探究課題シートとの関連を意識させ、探究

課題シートの見直しも検討しながら、個別の実習の具体的な取り組みを指導教員と共に確認するようにした。プレゼンテーション資料を作成するにあたって、院生にとって一番難しかったのが、実習で得たデータをどのように生かしたらよいのか、つまり、「自己の過去の実践と実習校での実践内容や得た経験との関係をどう構築してまとめるか」という点であった。その点については、関係の構築例として図4の資料を提示し、イメージをもたせた。発表の際は、その関係性示しながらデータの活用を分かりやすく伝えている院生も多く見られた。

多くの院生が、附属学校における学校研究の内容や運営を中心に特色ある教育活動等に目し、それらの事例と自分の実践との関係性をあらゆる角度から構築した発表の構成となっていた。院生の発表テーマは表2のとおりである。

表2 プレゼンテーション発表会における院生のテーマ

学生	教科等	テーマ
現職 A	中学国語	・質の高い集団づくり (集団としての質を高める三要素)
現職 B	中学英語	・生き生きと表現する生徒を育成するためには ・生徒が主体的に学校行事を創造していくためには
現職 C	中学英語	・子どものリーダーシップを引き出す教師のリーダーシップ
現職 D	小学校 (国・美)	・小中の学びをつなぐ系統的な指導の在り方 ・研修係に求められる専門性と実務の様相
学卒 E	中学理科	・生徒の学びを促す授業デザイン ・学校の特徴的な取組と業務内容の把握
現職 F	小学校 (国語)	未来を拓く資質・能力の育成を目指した学校ぐるみの協働 ～「児童が協働する授業」のデザインと「教職員集団の協働」のファシリテート～
現職 G	小学校 (道徳)	「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざして ～附属小からの「学び」を通して～
現職 H	小学校 (理科)	教師と子供、子供同士、教師同士の「つながりのある対話」
現職 I	小学校 (体育)	児童・教師の困り感を改善し、高め合える環境を目指して～附属小学校の実践を通して～
現職 J	小学校 (算数)	・学級づくり、情報活用能力、算数科における授業改善 ・研究公開の運営方法、特徴的なカリキュラム
現職 K	小学校 (社会)	カリキュラム・マネジメントを通じた学校改善・充実の在り方
学卒 L	小学校 (社会)	・すべての子どもが授業に参加し、考えたり、分かたりすることの喜びを感じられる授業づくり ・学校の教育力を高めるためにはどのような取組がなされているのか

## 4. 高度化実践実習 I の成果

### 4.1 プレゼンテーション発表に見られる高度化実践実習 I の成果

発表テーマの基となっている2つの探究課題（授業等の実践に関する探究課題と組織的業務に関する探究課題）に関して、院生が附属学校でどのような教育活動や校務等の場面に目しデータとしているかを発表資料からとりだしたものを以下に示してある。

表3 探究場面の一覧表

1. 教師と生徒がいっしょになって企画運営する学年集会
2. 学級や生徒の頑張りを紹介する学年掲示版
3. 生徒会主催のリーダー研修会
4. 生徒会代議員会での話合い
5. 英語の授業における課題設定
6. オールイングリッシュの授業展開
7. 単元ごとに育てたい力・態度が明確に示された単元シート
8. 責任と自信を持たせる運動会における係活動
9. 運動会と文化祭の行事のつながりを意識させる実行委員会の企画
10. 学校行事（合唱）の成功にむけた道徳，学級活動の授業展開
11. 生徒会主催の教育学部実習生との交流会
12. 学年主任の思いが伝わる学年部会
13. 主体的・対話的で深い学びを意識した板書計画
14. 対話的な学びに積極的に関わり主体的で深い学びを実現する指導
15. 教頭による学校を基盤とするカリキュラム開発に関する講話
16. 教師と子供との対話中に見られる教師の傾聴と学びのつながり
17. 長期的戦略を語る「企画・運営改善プロジェクト」
18. Q-Uの実施とその活用
19. 思考を広げる発問・声かけ
20. 複式学級におけるガイド学習
21. 働き方改革におけるペーパーレス化，時刻表の変更
22. 職員の協働性，同僚性につながる職員作業，職員体育
23. UDのチェックシートを用いた省察
24. 中学校の授業における教科の専門性
25. 附属幼稚園・小学校・中学校連絡会
26. P e p p r を使ったプログラミング学習
27. 外部との連携を図った日曜参観の授業
28. よりよい研究組織の構築に向けた研究委員会・校内研究
29. コーチングを生かした学部実習生への指導
30. 深い学びを実現する学習指導のポイントに基づいた授業
31. メンター制による新任者授業の取組
32. 研究公開に向けた教科研究充実を図る教科部会，三部会
33. 研修の場としての役割も持つ各教科部員から構成される学年会
34. 管理職，主幹教諭，学年主任の役割と具体的な実践

以上の3項目を、以下のA, B, Cの3つに分類した。

A.主として授業デザイン・実践・評価に関連すること【3,4,5,6,7,8,9,10,13,14,16,18,29,20,23,24,26,30】

B.主として学校組織の経営に関すること【11,12,15,17,21,22,25,28,29,31,32,33,34】

C.その他【1,2,27】

高度化実践実習 I は、主として個人の授業実践の高度化に関する実務習熟や課題探究を行うこと(=A),そして主として学校の組織的業務に関する実務習熟や課題探究を行うこと(=B)の2点が、学部新卒学生と現職教員学生の双方に求められている。多くの項目(31/34) AやBに該当すると考えられることから、院生たちは実習の目的に即しつつ自らの探究課題を設定し、その探究に必要な場面を観察したり、関係者に話を聞いたりしながら、実習を展開できていると言えよう。

#### 4.2 中間成果報告に見られる高度化実践実習 I の成果

第1期生にあたる院生は、平成29年度末に中間報告会にて、1年間かけて各実習の学びと自身の選択する専門分野での探究課題とをリンクさせながら、1年間の学びを発表し、中間成果報告書にまとめている。その中間成果報告書にある高度化実践実習 I に関する記述をもとに院生にとっての本実習の意義について考えてみたい。なお、下線は筆者らによる加筆である。

[附属中学校での実習に取り組んだ現職教員学生Aの記述から一部抜粋]

附属中学校では、「信頼」の醸成が「意図的な場の設定」によって行われていた。印象的だったのが生徒会主体で夏季休暇中に実施しているリーダー研修会である。準備段階までは、担当教員が生徒に念入りに根回ししていた。生徒自ら企画し、指導を仰ぎに来るような言葉による仕掛けをする。

取り組んでもらいたいことや身につけて欲しいことを、生徒自身が気づくように言葉を吟味して語っていた。生徒同士は、対話により新たな型を模索し、例年とは異なるシナリオを考えて実行に移していた。平成29年度のリーダー研修会は、生徒たちが対話と協働によって創造性を発揮していた。

(途中省略)

イベントや係活動などで生徒が場面ごとにリーダーになる仕掛けが随所にある附属中学校では、対話と協働を通して信頼体験が経験できるようになっていた。意図的な仕掛けによって相互に触発し合う偶発性を引き出す教育活動の展開の一例を見ることのできた実習となった。

[附属中学校での実習に取り組んだ現職教員学生Bの記述から一部抜粋]

附属中学校では「適切な評価」と「生徒を信じて任せるための情報共有の重要性」を学んだ。「台湾からの実習生に附属中周辺のオススメのお店を紹介する」というパフォーマンス課題を用いた授業を参観した。英語話者である他者とコミュニケーションをとる課題によって英語で話す必要感を感じ、生徒は自ら地図を書いて道順を説明したり、分かりやすく説明をしようと写真を見せたりと

工夫をする姿が見られた。生徒にルーブリックが示され、評価の規準が明確だったことで、生徒は自己の活動を評価し、次時への意欲を増していた。また、行事運営において生徒が自ら動く姿が見られた。その背後には生徒と教師、教師同士の徹底した情報共有があり、「何の行事に向けて、今誰が何をしているか」を全職員が確認できる場が定期的に設定されていた。このような徹底した情報共有が、生徒のことを信じて見守るという教師の姿勢に繋がっていたと感じた。

[附属中学校での実習に取り組んだ現職教員学生Cの記述から一部抜粋]

実習においては、実習校である附属中学校（高度化実践実習Ⅰ）、伊敷中学校（開発実践実習Ⅰ）で、授業や生徒の自主的活動の観察や先生方へのインタビューを行った。具体的には、附属中学校では校長先生、副校長先生、教頭先生、主幹教諭、教務主任、英語科教科主任をはじめ教科部の先生方、今回対象としたクラスの学級担任に対して、また伊敷中学校では校長先生、教頭先生、教務主任、教務補佐、英語科教科主任をはじめALTを含む教科部の先生方、他教科の教科主任にお話しを伺うことができた。このように、様々な立場の先生方への取材を行うことで、リーダーシップの実態を把握したり、また2年目の実践に向けてのヒントを探したりすることにつながった。

[附属中学校での実習に取り組んだ学部新卒学生Eの記述から一部抜粋]

高度化実践実習Ⅰでは、鹿兒島大学教育学部附属中学校（5月8日～9月26日 60時間）で実習を行った。附属中学校の理科の授業参観では、対話的な授業実践に向けて、先生方がどのような発問をなされているのかを中心に参観を行った。発問の中でも丁寧に実践されていたことは、生徒の発言の意図の根拠を明確にするために、「その予想は、どこから考えられましたか」などの問いかけを行っていた。また、机間指導の際に生徒に実験を見る視点を与え、生徒の考察を促していた。さらに、附属中学校の理科の授業では、ワークシートを工夫し授業の振り返りを各自で行うことで、単元を通した理解に図り、生徒の学びの軌跡となっていた。また、生徒自身のまとめる力も育成されるものとなっていた。

[附属小学校での実習に取り組んだ学部新卒学生Lの記述から一部抜粋]

高度化実践実習Ⅰでは、自己の実践を高度化するため、教育実習の課題をもとに、子どもの実態を踏まえた全員参加の授業づくりに挑戦した。現職の院生と協働してレディネステストを作成して実施したり、ユニバーサルデザインの視点を授業に取り入れたりした。検証授業では、全員が分かる授業になるよう、レディネステストで把握できた子どもの実態をもとに、支援が必要な子どもには注意を払い、既習事項の確認や見通しを持てるようにする手立てを講じた。しかし、実際の授業は、一部の子どもは積極的に授業に参加していたが、曇った表情の子どもも見受けられ、全員参加の授業とは言えないものだった。また、その曇った表情の子どもの姿から、「何を考えていたのかな、子どもの思考が見えたらいいのに」と感じた。そのように感じたことを、実習校の先生との授業反省会で話をしたところ、実習校の先生から子どもの学びの見取りに関



する重要な示唆を得ることができた。

現職教員学生 A, B の報告を見ると、子供の様子とその背景にある教師たちの取り組みとの双方とが観察され、両者の繋がりについて探究されていることが確認できる。教師たちの取り組みについては、公開研究会などにおいてもその具体を知る機会が乏しく、各勤務校において実務を重ねながら経験的に学んでいることが多いことから、具体を知ることができたことも学びとしては重要であろう。また、その取り組みの意義を子供の様子の観察を通して納得的に理解していると考えられる。こうした納得を伴う理解があるからこそ、2年目、勤務校に戻った際に、学びを活用したり、子どもの姿を通して説明することで学校内に学びを還元しやすくなると考えられる。この点は、本実習の成果の1つである。また、勤務校への還元ということ言えば、現職教員学生 C の報告を見ると、高度化実践実習 I と他の実習とで収集したデータを基に、「リーダーシップの実際を把握したり、また2年目の実践に向けてのヒントを探したりする」という、2学年通しての探究の連続性が確認できる。

また、A の院生は主として特別活動を対象に、B の院生は主として教科の学習を対象にした探究成果を報告しており、探究領域の多様性が確認できる。これも、各自のニーズに応じて学校と実習メニューを検討している実習の成果の1つであろう。また、学部新卒学生の両者はともに、授業づくりの基盤と考えられる点を意識しながら、観察や授業実践を展開していることがわかる。現職から学部新卒まで、多様なキャリアの院生が、各自にとってニーズに応じた学びを展開できていると考えられる。

## 5. おわりに

### 5.1 課題

平成 29 年度の高度化実践実習 I を進めるにあたっては、前年度から附属学校との打合せを行い、本実習の目的の達成のためにすることと実習校でできることを互いに共通理解を図ってきた。実習校にあっては、これまで学部の実習指導を長年にわたって取り組んでいる実績もあり、その実績が本実習を受け入れる際のハードルをクリアできていることも感じた。一方で学部実習と本学教職大学院としての実習の違いに困惑している状況もあったように思える。

具体的な課題としては次の点が挙げられる。

#### ① スケジュールの見直し

個別実習の開始時期が1学期後半であったため、授業参観できる時間を十分に確保することができなかった。オリエンテーション、事前指導の時期の検討が必要である。

#### ② 学部新卒学生と現職教員学生の協働による授業検討の充実

学部新卒学生による検証授業の実施にあたり、現職教員学生のメンターとしての役割を明確にできなかった。事前指導において目標の確認と実習としての位置付けを明確にする必要がある。

#### ③ 個別の実習に対応した計画表の検討

個別の実習においては、各個人が実習校の担当教員と連絡を取り合い、実習の日時を決めて行くことから、個別の計画をリアルタイムに把握できる工夫が必要である。

## 5.2 今後の展望

本学教職大学院は、現職教員学生と学部新卒学生との協働を1つのコンセプトとしている。本実習においては、初年度ということもあり、この点に課題が残されている。今後、両者が協働しながら課題探究を行うことが可能であるかや、その促進のためにどのような指導や支援を行っていくかについて、検討を進める必要がある。

## 引用文献

鹿児島大学大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻（教職大学院）中間成果報告書（平成29年度）